Japanese Journal of Educational Psychology, 1997, 45, 355—362

資　料

楽観的帰属様式尺度の作成[3]

沢宮容子[1]　田上不二夫[2]

CONSTRUCTION OF AN OPTIMISTIC ATTRIBUTIONAL STYLE QUESTIONNAIRE

Yoko SAWAMIYA AND Fujio TAGAMI

The purpose of this study was to construct the new Optimistic Attributional Style Questionnaire, and to examine its reliability and validity. For this purpose, two main inquiries were carried out. First, a preliminary questionnaire was given to 233 adults and 233 university students. Factor analysis yielded three factors, thus establishing three subscales. Following was an elaborated version of the questionnaire, i.e., the new Optimistic Attributional Style Questionnaire consisting of 23 items, and administered to 87 junior college students and 71 vocational school students. Its test-retest reliability coefficients with a three-month time interval ranged from .63 to .70, thus confirming its reliability. Correlational analyses with Yatabe-Guilford Personality Inventory proved validity in each subscale. The new Optimistic Attributional Style Questionnaire showed both its reliability and validity.

Key words : optimism, construction of the scale, reliability and validity, attributional style, learned helplessness.

Seligman (1991) は，原因帰属には2つの対照的な傾向，すなわち楽観的な説明スタイルと悲観的な説明スタイルがあると述べている。楽観的な説明スタイルにおいては，自分にとって正の出来事すなわち望ましい良い出来事が起きたとき，その出来事を内的 (internal : 自分自身に関係がある) で，永続的 (stable : これからも長く続く) で，全体的 (global : あらゆる場合に作用する な原因によるものとして説明する。反対に，負の出来事すなわち望ましからぬ悪い出来事が起きたとき，その出来事を外的 (external : 自分以外に関係がある) で，一時的 (unstable : 長くは続かない) で，特異的 (specific : 特定の場合にのみ限って作用する) な原因によるものとして説明する。「楽観的」な人間とは，このように楽観的な説明スタイル (帰属様式) を持つ人間のことであるとSeligman (1991) は定義し，楽観的な説明スタイルを測定する尺度を作成した。本研究の目的は，Seligman(1991)の「楽観的帰属様式尺度」を日本の実情に合うように改変した日本版を作成し，その信頼性と妥当性を検討することである。

帰属様式を測定する尺度は，学習性無力感の研究の中で過去にいくつか作成されている。Seligman, Abramson, Semmel & Baeyer (1979) は大学生を対象に帰属様式尺度 ASQ (Attributional Style Questionnaire) を開発した。これは，正・負各々6の仮説的出来事の原因について，その原因を推測し，上記の内的—外的，永続的——一時的，全体的—特異的の3次元上で評定するものである。小島 (1983) はこの日本版を作成し，女子大学生を対象に抑うつ尺度との関連を検討している。また強矢・細田・高島・青柳 (1987) は，一連の学習性無力感の研究の中で，Peterson, Semmel, Baeyer, Abramson, Metalsky & Seligman (1982) の ASQ を

[1] 大東文化大学 (Daito Bunka University)
[2] 筑波大学 (University of Tsukuba)
[3] 本研究は文部省科学研究費補助金 (課題番号07801019) の援助を受けて行ったものである。

翻案し，日本版帰属スタイル尺度を作成している。ただし，ASQには各次元ごとの合計得点の内的一貫性が低いという難点がある。この難点を克服するため，欧米ではASQを改訂した新しい尺度が2種類開発されている。1つは24の負の出来事のみから構成されるEASQ (Expanded Attributional Style Questionnaire ; Peterson & Villanova, 1988) である。日本では成田・今田・新浜 (1990) がこれを翻訳して，22の負の出来事から構成される尺度を作成し，信頼性を確認している。もう1つはEASQ (Extended Attributional Style Questionnaire ; Metalsky, Halberstadt & Abramson, 1987) とCSQ (Cognitive Style Questionnaire) を合わせたMetalsky & Joiner (1992) のASQ−Eである。これは，CSQの追加によって，従来の3つの次元に，自己に対する認知，結果に対する認知という2つの新しい次元を加えたものであり，藤南・園田・詫摩 (1993) が信頼性を確認している。

これらの2つの尺度は，いずれも負の出来事のみから構成されている。改訂学習性無力感の研究においては，負の出来事についての帰属様式を重視し，正の出来事についての帰属様式をさほど重視していなかったことがその理由である。ところが，日本では欧米と異なり，どちらかといえば正の出来事についての帰属様式の方が主であった (小島, 1983 ; 村上, 1987, 1989 ; 新名, 1984 ; 桜井, 1987, 1989)。本研究で取り上げるSeligman (1991) の楽観的帰属様式尺度は，負の出来事と正の出来事の両方を含む尺度であり，正・負いずれの出来事についても帰属様式の検討が可能である。

またPeterson & Villanova (1988) のEASQ，あるいはMetalsky & Joiner (1992) のASQ−Eは，自由記述式の質問項目を含み，実施に長時間要するという難点を持っている。本来Abramson, Seligman & Teasdale (1978) の改訂学習性無力感理論は因果関係のモデルであり，今後は因果分析も必要となってくる。例えば，Nolen-Hoeksema, Girgus & Seligman (1986) が児童を対象にして抑うつ傾向と原因帰属様式を5回測定し因果関係を検討しているように，実施回数を増やし，また他の質問紙と組み合わせて検討することも求められるようになってくる。この場合，実施に長時間を要する質問紙では，対象者に負担をかけるばかりでなく，結果の信頼性も低下させかねない。さらに，高齢者や抑うつ病者などの被験者集団においては，項目数の多い質問紙を実施することは現実的に困難であり，項目数は極力少なくするべきだとの指摘もある (井上, 1975 ; 鎌原・樋口・清水, 1982)。

村上 (1987) は，抑うつ病者を含む一般社会人を対象にしてASQ邦訳版を実施した場合，原因を自由記述させる質問項目においては，「わからない」および無回答が多く，特に抑うつ群においてその傾向が顕著であったという結果から，原因帰属を求める質問内容は，ある程度の知的レベル，および柔軟性を持つ大学生においては実施が容易であるが，この種の質問紙に不慣れな一般社会人には，かなりの困難が伴うものであると指摘している。これに対し，Seligman (1991) の楽観的帰属様式尺度は，二者択一式の実施が容易な尺度であり，広範囲に利用が可能である。

また帰属様式を測定する際に，対人領域 (Interpersonal) と非対人領域 (Non-interpersonal)，あるいは対人関係領域と課題 (達成) 領域というように，場面を2通りに分類した上で帰属様式を測定するアプローチもある (Anderson, Horowits & French, 1983 ; Anderson, Jennings & Arnoult, 1988)。日本においては，樋口・鎌原・大塚 (1983a) は児童を対象にし，学業達成場面に関する成功・失敗の事態ごとに，能力・努力・運要因などに関連する程度を自己評定させるというやり方で原因帰属様式を測定する尺度を作成し，さらに，友人関係場面での原因帰属様式を測定する尺度も作成している (樋口他, 1983b)。村上 (1989) は，この樋口他 (1983a) の帰属様式尺度と，Seligman et al. (1979) のASQを参考にし，学校における学習状況を取り上げた課題達成領域と，友人との関係を取り上げた対人関係領域の2領域に分類した上で，各々の成功・失敗場面における帰属様式を測定する大学生用の尺度を作成している。また桜井 (1992) は，学業達成場面と友人関係場面の2領域各々について負の出来事を設定して，大学生用の原因帰属様式尺度を作成し，さらに，学業達成の失敗場面ごとに原因を配置して，その程度を評定する大学生用の具体的帰属様式尺度を作成している (桜井, 1994)。

このように積極的に領域を特定し，その中での帰属様式を尋ねる方法は，ある学習場面における理論モデルを検討する際などに有効であるばかりでなく，内的一貫性を高めるためにも非常に有効な方法ではある。しかし，例えば学生にとっての学業達成場面のように，特定の対象者にとって重要な領域を設定することが多いことから，ある程度対象者を限定して尺度を使用する場合が少なくない。これに対し，Seligman (1991) の尺度は特に領域を設定していないことが特徴であり，このため広い対象に実施が可能である。

以上述べたように，Seligman (1991) の楽観的帰属様式尺度は，正の出来事との負の出来事の両方を含むこ

と，二者択一式で実施が容易であること，ある程度広い対象に利用可能な尺度であること，を特徴としている。本研究の目的は，このSeligman（1991）の尺度を，日本の文化的な背景に合わせて改変した日本版を作成することである。

調査1　楽観的帰属様式尺度の因子構造および信頼性の検討

目　的

Seligman（1991）の楽観的帰属様式尺度を，日本の文化的な背景を考慮して改変した日本版を作成する。楽観的帰属様式尺度の因子構造を確認し，さらに信頼性を検討する。

方　法

被験者　社会人233人（平均年齢26.1歳，男性141人，女性92人），大学生・大学院生233人（平均年齢20.3歳，男性84人，女性145人，性別不明4人），計466人（平均年齢23.2歳，男性225人，女性237人，性別不明4人）。

材料　以下の予備的検討を通して，Seligman（1991）の楽観的帰属様式尺度の原項目48項目から13項目を削除したものに，新たに36項目を追加し作成した計71項目の質問紙。

Seligman（1991）の楽観的帰属様式尺度は，48の仮説的出来事について，どのような帰属様式をとるかを測定するものである。48の出来事は，24の良い出来事（正の出来事，good event）と，24の悪い出来事（負の出来事，bad event）から構成されている。また帰属様式は，内在性（内的か，外的か），永続性（永続的か，一時的か），全体性（全体的か，特異的か）の，3次元×2＝6次元によって構成されている。以下，6次元それぞれについて項目の例を挙げる。

①「あなたが責任者だったプロジェクトが大成功を収める」という正の出来事の原因を，「私がみんなの仕事ぶりをよく監督したからだ」という内的な原因，「みんなが一生懸命やってくれたからだ」という外的な原因のいずれで説明するか，選択させる。

②「入院中なのに，ほとんど誰も見舞いにきてくれない」という負の出来事の原因を，「病気になるといらいらしてしまう私の性格のせいだ」という内的な原因，「友達はみんな気がきかないからだ」という外的な原因のいずれで説明するか，選択させる。

③「主催した夕食会が成功する」という正の出来事の原因を，「私は接待がうまいからだ」という永続的な原因，「あの晩はとくに上手に接待できたからだ」という一時的な原因のいずれで説明するか，選択させる。

④「友達の態度に我慢がならない」という負の出来事の原因を，「あの人はいつもしつこい」という永続的な原因，「あの人は虫の居所が悪かったのだ」という一時的な原因のいずれで説明するか，選択させる。

⑤「上司に短時間でプロジェクトを完成させるように言われて，あなたはなんとかやり遂げる」という正の出来事の原因を，「私は有能な人間なのだ」という全体的な原因，「私はこの仕事が得意なのだ」という特異的な原因のいずれで説明するか，選択させる。

⑥「長い間練習してきたのに，競技会で負けてしまう」という負の出来事の原因を，「私にはスポーツの才能がないからだ」という全体的な原因，「私はこの種目は得意ではないからだ」という特異的な原因のいずれで説明するか，選択させる。

なお，教示の文章は以下の通りである。「1～48の質問について，もし自分がそれぞれの状況にあったとしたら，どう考えるかを想像してみてください。あなたが全く経験したことのない状況であってもかまいません。ABいずれの答えにも当てはまらない場合があるかもしれませんが，より近いと思われるほうに○をつけてください。それぞれの質問に対し，AかBのどちらか1つだけに○をつけてください」。

このSeligman（1991）の楽観的帰属様式尺度を翻訳した質問紙を，社会人および専門学校生190人（平均年齢23.9歳，男性56人，女性134人）を被験者として予備的に実施したが，6つの次元のα係数は.16～.43と内的一貫性が低く，尺度を日本語に翻訳するだけでは不十分であることが明らかになった。内的一貫性の低さの原因の1つは，日米間の文化的差異による，良い（正の）出来事と悪い（負の）出来事の捉え方の問題と考えられた。そこで，原尺度の出来事48項目について，各々の出来事を，良い出来事と捉えるか悪い出来事と捉えるかを，短期大学生および専門学校生134人（平均年齢19.9歳，男性30人，女性104人）を被験者にして回答させ，あらかじめ想定された通り正あるいは負と回答した者が90.0%以下の13項目を削除することにした。

さらに，日本の文化的背景を考慮して，新しく6次元6項目ずつ計36項目を追加した。この36項目は，社会人および短期大学生，332人（男性103人，女性226人，性別不明3人）を被験者にして，「あなたにとっての望ましい良い出来事（good event）と，望ましくない悪い出来事（bad event）を5つずつ挙げてください」という質問について自由記述による回答を求めることによって収

集し，KJ法によって整理し，領域(場面)を考慮して選んだものである。それぞれの項目は，帰属の次元が混交しないように配慮して選択肢を作成した。

手続 1994年10～11月，上記の質問紙を実施した。

結果と考察

(1)項目の抽出と内容的妥当性の検討

因子分析に先立って，一方の回答率が80.0%以上に偏っている項目を削除した結果，6つの次元について各々8項目あるいは9項目，全体で計49項目が残った。この49項目の内容と6つの次元の分類について，心理学専攻の大学院生および教官4人による検討を受けたところ，項目分類一致率は.94であり，内容的妥当性は高いと判断した。

(2)因子分析による尺度項目の分析

因子分析は，共通性の推定値として重相関係数の2乗値(SMC)を使用し，主因子法によって因子を抽出した後，バリマックス回転を行った。探索的に，因子数2から因子数7までの分析を行ったが，因子の安定性，解釈のしやすさに考慮し，3因子解を採用した。その後，因子負荷量が.30に満たない項目，因子的に曖昧な項目，計16項目を削除し，残り33項目について，再度，因子分析を行った。この結果から，やはり3因子を抽出し，バリマックス回転を施したところ，当初仮定した次元に対応する因子を含む因子構造が得られた。そこで，さらに因子負荷量が.30に満たない項目，因子的に曖昧な項目，計8項目を削除して，25項目について，もう1度，同じ手続で因子分析を行ったところ，TABLE 1に示される結果が得られた。

第一因子は，「待ち合わせに遅れてしまった」「電車に乗り遅れてしまった」「大切にしていたものを壊してしまった」など7項目に高い因子負荷量を示しており，負の出来事における全体性次元である負―全体性(Pervasiveness Bad)と永続性次元である負―永続性(Permanence Bad)の和である「負―(永続性＋全体性)」(Permanence & Pervasiveness Bad)因子と命名した。第二因子は，「自転車が盗まれた」「転んでケガをしてしまった」「他人のいざこざに巻き込まれた」など9項目に高い因子負荷量を示しており，負の出来事における内在性次元である「負―内在性」(Personalization Bad)因子と命名した。第三因子は，「スポーツ大会で優勝した」「友達があなたにアドバイスを求めてきた」「コンクールで入選した」など9項目に高い因子負荷量を示しており，正の出来事における全体性次元である正―全体性(Pervasiveness Good)と永続性次元である正―永続性(Permanence Good)の和である「正―(永続性＋全体性)」(Permanence & Pervasiveness Good)因子と命名した。

(永続性＋全体性)という2つの次元の合計は，ある出来事の原因を，その場面を越えて空間的に，時間的に「一般化」する程度をあらわしていると考えられる。Metalsky, Abramson, Seligman, Semmel & Peterson (1982)は，全体性次元と永続性次元の2つの次元を合計したものを，「抑うつ反応を予測する一般性下位尺度 (Generality Subscale)」と呼んでいる。今回の因子分析の結果は，このMetalsky et al.の提唱する内容と符号しており，高い妥当性が認められる。

また今回の因子分析においては，第二因子として負の出来事における内在性次元(Personalization Bad)が得られたのに対し，正の出来事における内在性次元(Personalization Good)は安定した因子としてまとまらなかった。なぜ正の出来事における内在性次元は1つの因子として安定しなかったのか，今回の研究では理由を明らかにできなかったが，正の出来事における内在性次元と負の出来事における内在性次元とが，異なる性質を持つものであることは推測できる。正の出来事における内在性次元に相当する因子が抽出されなかったことについては，今後さらに検討を加える必要があるだろう。

(3)信頼性の検討

各因子について負荷量.40以上の項目で下位尺度を作成した。因子負荷量が.40未満であった2項目は，I-T相関が.40以下の項目と，項目を削除した場合にα係数が高くなる項目と重なっている。

各々の下位尺度のα係数ならびに各項目のI-T相関もTABLE 1に示したが，α係数の値はやや低くなっているものの，一応内的一貫性のあることがわかる。また，特に内在性次元である負―内在性(Personalization Bad)の信頼性の値が低くなっているが，これは先行研究の結果とも一致する。すなわち，樋口・清水・鎌原(1979)は，Locus of Controlに関する研究は，LOC概念の多次元性を主張する傾向のあることを指摘しているし，Peterson & Seligman (1984)は，このように内在性次元の信頼性が低いのは，内的―外的次元は多次元的なものであるためではないかとしている。

さらに，全被験者の得点分布から，上位33.3%の上位群と下位33.3%の下位群を抽出し，G-P分析を行った。その結果すべての項目において0.1%水準で有意な差が認められた。

楽観的帰属様式尺度の下位尺度間相関は，TABLE 2に示した。3つの下位尺度間の相関係数の値そのもの

TABLE 1　楽観的帰属様式尺度の因子分析結果，各下位尺度の α 係数ならびに各項目のI-T相関

質問項目［出来事］	第1因子	第2因子	第3因子	I－T相関
・負―(永続性＋全体性)・				
待ち合わせに遅れてしまった	.76	.09	-.07	.74
電車に乗り遅れてしまった	.70	.00	.01	.68
大切にしていたものを壊してしまった	.66	.08	-.08	.66
鍵を落としてしまった	.44	.05	.03	.51
＊期限が来ても本を返さなかったので，貸し出し停止になった	.42	.01	-.02	.50
友人に誤解された	.42	.03	-.01	.45
(大事な約束を忘れてしまった)	.38	-.19	-.09	——
・負―内在性・				
自転車が盗まれた	.01	.52	.05	.52
転んでケガをしてしまった	.03	.51	.05	.50
他人のいざこざに巻き込まれた	.03	.49	-.02	.54
＊入院中なのに，ほとんど誰も見舞いにきてくれない	-.04	.48	-.19	.51
友人に裏切られた	-.07	.46	-.12	.50
＊あなたと配偶者（ボーイフレンド／ガールフレンド）は，このごろけんかが多い	.09	.42	.02	.44
＊配偶者（ボーイフレンド／ガールフレンド）に贈り物を買うが，気に入ってもらえない	.06	.41	-.06	.47
自信のあった試験なのに，結果がよくなかった	.06	.40	-.07	.47
(友達同士の旅行に，自分だけ誘ってもらえなかった)	-.20	.36	.06	——
・正―(永続性＋全体性)・				
＊スポーツ大会で優勝した	.00	-.16	.54	.52
＊友達があなたにアドバイスを求めてきた	.00	.06	.52	.52
コンクールで入選した	-.08	.25	.49	.55
＊上司に短時間でプロジェクトを完成させるように言われて，あなたはなんとかやり遂げる	.00	-.30	.49	.51
健康診断で異状なしと言われた	-.24	.01	.47	.50
人から親切にしてもらった	.17	.19	.47	.46
友人の誤解がとけた	-.05	.21	.46	.47
資格試験に挑戦し，見事パスした	-.06	-.01	.45	.42
友人に適切なアドバイスをすることができた	.03	-.14	.44	.42
固有値	2.35	2.19	2.17	
寄与率(%)	9.40	8.76	8.68	
累積寄与率(%)	9.40	18.16	26.84	
尺度を構成した際の α 係数	.63	.56	.59	

注　＊はSeligman(1991)の原尺度に含まれていた項目

TABLE 2　楽観的帰属様式尺度の下位尺度間相関

	負―(永続性＋全体性)	負―内在性
負―内在性	.08＋	
正―(永続性＋全体性)	-.11＊	-.15＊＊

＋p<.10，＊ p<.05，＊＊ p<.01

は低く，各々の下位尺度間の弁別性は高いことがわかる。

調査2　楽観的帰属様式尺度の信頼性と妥当性の検討

目　的

調査1で作成した楽観的帰属様式尺度の再検査信頼性，および妥当性を検討する。妥当性の検討のために，楽観的帰属様式尺度と同時にY-G性格検査を実施する。Y-G性格検査の1つの下位尺度として「D(抑うつ性)」があるが，これまでの研究より，楽観性が高い人ほど抑うつ性は低く，さらにE系統値(不安定消極型)は

低く，逆にD系統値（安定積極型）は高いと考えられる。したがって，楽観的帰属様式尺度の下位尺度である「負—(永続性＋全体性)」および「負—内在性」尺度と，Y-G性格検査のD尺度，E系統値とは正の相関，D系統値とは負の相関が存在することが予測される。逆に，「正—(永続性＋全体性)」尺度と，Y-G性格検査のD尺度，E系統値とは負の相関，D系統値とは正の相関が存在することが予測される。

方　法

被験者　短期大学生87人（平均年齢19.2歳，男性26人，女性61人），専門学校生71人（平均年齢19.0歳，男性22人，女性49人），計158人（平均年齢19.1歳，男性48人，女性110人）。

材料　①これまでの調査の結果から作成した計23項目から構成される楽観的帰属様式尺度　②MMPIのL尺度　③Y-G性格検査

手続　楽観的帰属様式尺度を実施したのち，MMPIのL尺度，およびY-G性格検査を実施した。実施時期は1994年9月であった。さらに3カ月後，再検査法によって信頼性を検討するため，専門学校生のうち40名については，楽観的帰属様式尺度を再実施した。

結果と考察

分析に先立って，MMPIのL尺度の粗点が11以上の応答については信頼性がないと考え除外するという基準を設けたが，この基準にあてはまる応答例はなかった。3つの下位尺度の，3カ月後の再検査による信頼性係数は，負—(永続性＋全体性)が.70，負—内在性が.68，正—(永続性＋全体性)が.63，といずれも十分な値が得られた。したがって，内的一貫性はやや低めであったものの，再検査法による信頼性は比較的高く，楽観的帰属様式尺度の信頼性は確認されたといえよう。

楽観的帰属様式下位尺度の平均値と標準偏差，およびY-G性格検査との相関を，TABLE 3に示した。負—(永続性＋全体性)は，Y-G性格検査の抑うつ性との間に正の有意な相関，E系統値との間に正の有意な相関，D系統値との間に負の有意な相関が見られる。正—(永続性＋全体性)は，Y-G性格検査の抑うつ性との間に負の有意な相関，E系統値との間に負の有意な相関，D系統値との間に正の有意な相関が見られる。負—内在性は，Y-G性格検査のE系統値との間に正の相関が予想されたが，相関は高くはないもののその傾向は認められた。また抑うつ性との間に正の相関，D系統値との間に負の相関が予想されたが，いずれも有意な相関は見られなかった。

TABLE 3　楽観的帰属様式下位尺度の平均値と標準偏差，およびYG性格検査との相関

	負—(永続性＋全体性)	負—内在性	正—(永続性＋全体性)
平均値	2.63	4.22	2.95
標準偏差	1.61	1.91	1.69
E系統値	.23**	.15+	-.26**
D系統値	-.18*	-.03	.36***
D	.18*	.03	-.24**

+p<.10，* p<.05，** p<.01，*** p<.001

これらの結果から，理論的に関連があると予想された変数とは，ほぼ相関関係が認められ，おおむね妥当な結果だったといえる。しかし，有意な相関ではあるものの，相関係数は必ずしも高いとはいえず，今後ASQなど他の尺度との関連を含め，多様な観点からさらに妥当性を検討する必要があるだろう。

内在性次元は，その他の次元とやや異なる結果となった。Abramson, Metalsky & Alloy (1989) による研究では，内在性次元がその他の次元とは異なる位置づけがされており，本研究の結果と関連していると考えられる。また楽観性と抑うつとの関連において，内在性次元を除いた分析を行うことで有意な結果が導かれている（Abramson et al., 1989；Metalsky et al., 1982；Metalsky et al., 1987；Metalsky & Joiner, 1992；藤南・園田, 1994）。さらに改訂理論においては，負の出来事の原因を内的に求めることにより，セルフエスティームの低下が生じると考えられた（Abramson et al., 1978）。Abramson et al. (1989) は抑うつに関する絶望感理論（hopelessnessモデル）において，内在性次元は直接絶望感につながるものではなく，自尊心の低下をもたらすものとして位置づけている。このようにセルフエスティームは，理論的には原因帰属のうち，特に内在性次元と関連を持つことが知られている。日本においては，増田 (1994) が，帰属スタイルとセルフエスティームの関連を検討しているが，改訂理論も，絶望感理論もともに支持しない結果となっている。今後，内在性次元については，さらに厳密な検討を加えることが必要であろう。

Seligman (1991) により作成された楽観的帰属様式尺度の原項目を翻訳しただけの尺度はきわめて信頼性の低いことが，予備的検討を通して明らかになった。信頼性を低める要因と考えられる不適切な項目を削除し，さらに日本の文化的背景を考慮して項目を追加することで，楽観的帰属様式尺度を作成し，調査1において，その因子構造を確認するとともに，内的一貫性を検討

した。さらに調査2においては，再検査法による信頼性と，Y-G性格検査との相関をとって妥当性を検討した。その結果，本楽観的帰属様式尺度には，実用に耐え得る信頼性と妥当性のあることが明らかになった。

本尺度の特徴は，2点挙げられる。

第1は，項目数が23項目と少なく，項目内容も平易で理解しやすいという点である。過去に作成された帰属様式を測定する質問紙は，高齢者や抑うつ病者を含む一般社会人を対象に実施するには，非常な困難が伴った。すなわち，測定対象をかなり限定せざるを得なかった。ところが本尺度の作成によって，測定対象を幅広く設定することが可能となった。また実施が容易であることから対象者への負担が軽くなった。因果関係的に理論の検討を行ったり，他の質問紙と組み合わせて検討したりする場合などにも，用いやすくなった。

第2は，正の出来事と負の出来事の両方を含む尺度であるという点である。これによって，正の事態に対する（永続性＋全体性）の帰属様式と，負の事態に対する（永続性＋全体性）の帰属様式との働きに違いがあるかどうかの検討が可能になった。

引用文献

Abramson, L.Y., Metalsky, G.I., & Alloy,L.B. 1989 Hopelessness depression : A theory-based subtype of depression. *Psychological Review*, **96**, 358—372.

Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P., & Teasdale, J.D. 1978 Learned helplessness in humans : Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 49—74.

Anderson, C.A., Horowits, L.M., & French, R.D. 1983 Attributional style of lonely and depressed people. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 127—136.

Anderson, C.A., Jennings, D.L., & Arnoult, L.H. 1988 Validity and utility of the attributional style construct at a moderate level specificity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 979—990.

樋口一辰・鎌原雅彦・大塚雄作　1983a　児童の学業達成に関する原因帰属モデルの検討　教育心理学研究, **31**, 18—27.

樋口一辰・鎌原雅彦・大塚雄作　1983b　友人関係場面における原因帰属様式と社会的地位　教育心理学研究, **31**, 141—145.

樋口一辰・清水直治・鎌原雅彦　1979　Locus of Control に関する文献的研究　東京工業大学人文論叢 No.5, 95—132.

井上勝也　1975　老年期の心理テスト　長谷川和男・那須宗一 (編)　ハンドブック　老年学　岩崎学術出版社

鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治　1982　Locus of Control 尺度の作成と，信頼性，妥当性の検討　教育心理学研究, **30**, 38—43.

小島理恵　1983　女子大生における原因帰属スタイルと抑うつ水準との関係—ASQ日本版による検討—　日本心理学会第47回大会発表論文集, 425.

強矢秀夫・細田一秋・高島直子・青柳　肇　1987　学習性無力感に関する研究その3—認知的課題及び帰属スタイルとの関連—　立川短期大学紀要, 23—28.

増田真也　1994　原因帰属とセルフエスティームに関する研究　社会心理学研究, **10**, 56—63.

Metalsky, G.I., Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P., Semmel, A., & Peterson, C. 1982 Attributional style and life events in the classroom : Vulnerability and invulnerability to depressive mood reactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 612—617.

Metalsky, G.I., Halberstadt, L.J., & Abramson, L.Y. 1987 Vulnerability to depressive mood reactions : Toward a more powerful test of the diathesis-stress and causal mediation components of the reformulated theory of depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 386—393.

Metalsky, G.I., & Joiner, Jr.T.E. 1992 Vulnerability to depressive symptomatology : A prospective test of the diathesis-stress and causal mediation components of the hopelessness theory of depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 667—675.

村上裕恵　1987　抑うつ傾向と帰属様式　慶応義塾大学文学部社会学研究科紀要, **27**, 57—66.

村上裕恵　1989　状況の変化に伴う帰属様式の変化に関する実験的研究　慶応義塾大学文学部社会学研究科紀要, **29**, 25—32.

成田健一・今田　寛・新浜邦夫　1990　EASQ (Expanded Attributional Style Questionnaire) を用いた

帰属様式の測定 日本心理学会第54回大会発表論文集, 135.
新名理恵 1984 ASQ日本版による大学生の原因帰属スタイルの検討 日本心理学会第48回大会発表論文集, 619.
Nolen-Hoeksema, S., Girgus, J.S., & Seligman, M.E.P. 1986 Learned helplessness in children : A longitudinal study of depression, Achievement, and Explanatory style. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 435—442.
Peterson, C., & Seligman, M.E.P. 1984 Causal explanations as a risk factor for depression : Theory and evidence. *Psychological Review*, **91**, 347—374.
Peterson, C., Semmel, A., von Baeyer, C., Abramson, L.Y., Metalsky, G.I., & Seligman, M.E.P. 1982 The Attributional Style Questionnaire. *Cognitive Therapy and Research*, **6**, 287—300.
Peterson, C., & Villanova, P. 1988 An expanded attributional style questionnaire. *Journal of Abnormal Psychology*, **97**, 87—89.
桜井茂男 1987 大学生の絶望感および抑うつに及ぼす原因帰属の影響 日本心理学会第51回大会発表論文集, 591.
桜井茂男 1989 児童の絶望感と原因帰属との関係 心理学研究, **60**, 304—311.
桜井茂男 1992 大学生における不適応過程の分析 日本教育心理学会第34回大会発表論文集, 290.
桜井茂男 1994 大学生における不適応過程の分析III 日本教育心理学会第36回大会発表論文集, 319.
Scheier, M.F., & Carver, C.S. 1985 Optimism, coping, and health : Assessment and implications of generalized outcome expectancies. *Health Psychology*, **4**, 219—247.
Seligman, M.E.P. 1991 *Learned Optimism*. New York : A.A.Knopf.
Seligman, M.E.P., Abramson, L.Y., Semmel, A., & von Baeyer, C. 1979 Depressive attributional style. *Journal of Abnormal Psychology*, **88**, 242—247.
藤南佳代・園田明人 1994 ストレス反応に及ぼすストレッサー経験量と楽観性の効果 心理学研究, **65**, 312—320.
藤南佳代・園田明人・詫摩武俊 1993 楽観性とストレス研究 I : BDIとASQ—Eの項目分析 日本性格心理学会第2回大会発表論文集, 28.

付 記

調査にご協力いただいた被験者の皆様，また本論文をまとめるにあたり，貴重なご助言を賜りました筑波大学堀洋道教授，庄司一子助教授，千葉大学濱口佳和助教授に心よりお礼を申し上げます。

(1996.9.9 受稿, '97.4.11 受理)